

## 樹木葬の風景

上田 裕文\*

### 1. はじめに

「墓」といえば、街角で不意に出現する、そこだけ時間が止まったような小空間を思い浮かべるだろうか。もしくは、郊外に広がる、暮石が整然と並ぶ広大な眺めが連想されるだろうか。日常の片隅に常に存在しながらも普段あまり意識することのない場所が墓地である。しかしながら、人は必ず死に、死んだら墓に入る。そのため、人が住むところには必ず墓地がある。これは、世界共通の常識と言っても良いだろう<sup>1)</sup>。

私たちにとって、墓は石で作られたものという一般的な理解があるが、その歴史は意外に古くない。近世以降、石の墓が武士から庶民にも広がり、現在のような暮石の形になったのは明治以降と言われる<sup>2)</sup>。一方で、西欧の近代都市計画を取り入れ、日本に最初の公園墓地が誕生してから百年近くが経とうとしている。しかし、暮石が並ぶ日本の公園墓地を、一般的な公園のように日常的に訪れる習慣は未だ定着していない。

近年、こうした墓地の風景が急激に変化しつつある。本稿では、樹木葬を中心とする新たな墓地に焦点を当て、身近な風景の変化とその未来について論じる。

### 2. 社会構造の変化とともに変容する墓地の風景

死者の祭祀や墓の維持管理は、明治以降、後継ぎを前提とした「家」「家族」に委ねられてきた歴史があり、これまでは人口増加と共に墓地は増加し続けてきた。しかし、少子化の進展などによって人口減少に転じ、核家族化も進行する中、家族が先祖代々の墓を維持するという前提は既に崩れつつある<sup>3)</sup>。一方で、高齢化社会の後に多死社会を迎える日本では、今後も死亡者数が増加するとともに、墓地に対するニーズの多様化により、さらに多くの墓地が必要となることになる。このように、墓地は増加する一方で墓地を管理する世代の人口は減少するという状況において、これまでにない墓地のあり方が求められている。こうした背景の中、近年は承継者を必要としない永代管理・供養墓が人気となり、その他、散骨や樹木葬といったこれまで法律で定義されていなかった新たな葬送の形態も見られるようになった<sup>4)</sup>。

樹木葬とは、一般的には暮石の代わりに樹木を墓標に用いる自然葬の一種として認識されている。連日様々なメディアで取り上げられ、多種多様な樹木葬墓地のチラシを目にしない日はない。樹木葬はすでに墓地形態の一つとして日本に定着した感がある。

\*北海道大学 メディア・コミュニケーション研究院

しかし、そんな樹木葬も日本に導入されようやく20年が経った新しい埋葬の形態である。

### 3. 日本における樹木葬墓地の普及

日本における樹木葬墓地は当初、里山保全を目的として整備されたものであった。墓域の許可を得た範囲で間伐や歩道整備を行い、林床に掘った墓穴に焼骨を直接埋め、原生植生のツツジなどの低木を植樹する方式である。こうした既存の墓地埋葬法の範囲内で合法的に生まれた画期的埋蔵形態は多くの注目を集め、瞬く間に全国に広がった。当初は、埋葬箇所に苗木を植樹するタイプの樹木葬が模倣されたが、里山保全や地域の原生植生にまでこだわった樹木葬墓地は少なく、墓石の代わりに故人または生前の契約者の好きな樹木を植える墓地も多かった。また一方で、日本人に好まれる桜の木をシンボルツリーとして、その根元に複数の遺骨を埋葬する、共同墓タイプの樹木葬も間も無く姿を現し、都市部を中心に広がっていった。その後、これらの方法を基に、それぞれの墓地の置かれた環境条件や運営形態、市場ニーズに応じて様々なデザインの樹木葬墓地のデザインが試行錯誤されてきた。こうして日本では、墓石の代わりに樹木を用いるお墓の形態として、多様な樹木葬が展開していった。

次第に樹木葬墓地の知名度が上がるにつれ、墓石に比べて安価な墓、管理不要の墓としての側面も注目されるようになり、樹木葬墓地は永代管理の仕組みとも結びついて現代の社会ニーズに合致する埋葬形態として不動の地位を築いたかに見える。そして、戦後都市部に移住し、故郷に墓を持たない人々の需要に応える形で、樹木葬墓地は都市型の形態を強めていく。すなわち、当初のような里山の森林を活用した自然葬ではなく、都市部の狭い区画に多くの遺骨を効率よく埋葬した、明るい庭園風の都市型樹木葬墓地である<sup>5)</sup>。

### 4. 日本の墓地問題すなわち遺骨問題

新たな墓地の整備が進む一方で、利用者不明のまま放置される無縁墓が増加しており、その対応が地域の課題となっている。維持管理が難しくなった墓を改葬し、遺族が現在の居住地に移したり、合祀墓や自然葬のような承継不要な墓に変えたりといった



図-1 日本初の樹木葬墓地（知勝院）

「墓じまい」が進むとともに、墓地管理者による強制的な「無縁改葬」も徐々に始まりつつある。つまり、日本の墓地は、誰かによって承継され、管理されつづけることを前提とした空間であり、そのため、人口減少によって承継者がいなくなると、死者は墓から追い出されてしまうという事態が発生するのである。つまり、死者は安心して墓に眠り続けることが保証されていない。

こうした問題は、日本の埋葬のルールと密接に結びついている。すなわち、日本では、遺体の火葬までは義務づけられているが、火葬後の遺骨の取り扱いについて個人の自由に任されている。自宅で保管していても構わない、承継者の所有物となる。このことは、海外のルールとは大きく異なる。日本が公園墓地を導入した際に参考にしたドイツでは、土葬・火葬に関わらず埋葬までが義務付けられており、「死者の尊厳」の観点から、改葬などは原則認められていない。つまり言葉を換えれば、ドイツでは人は死んだら「場所」になるのに対し、日本では「物」になると言ってもよいだろう。このような意識の違いから、ドイツの墓地とは、死者たちと社会が「場所」を共有する空間であり、日本においては「物」を一時的、または半永久的に保管する空間であるとも言える。このことは、公共空間としての墓地の考え方に決定的な違いを生み出す。事実、現在の墓地空間や日常的な利用状況には大きな違いがある。

日本では遺骨の取り扱いについて自由度が高い一方で、お墓は子孫が引き継いでいかなければならないという家族墓の伝統的な考えも根強く残っている。そのため、少子化や核家族化、さらには流動化が進む社会においては、遺骨の保管場所は残された遺族の都合により移転される、いわゆる「墓じまい」と呼ばれる墓地の解消が見られるようになる。日本において樹木葬は、こうした遺骨問題とも密接に結びついた墓地形態の一つであることがわかる。

## 5. 「ふるさと」からみる樹木葬

人口流動が進む社会において、都市と地方を結びつける仕組みとしても樹木葬墓地は期待されている。

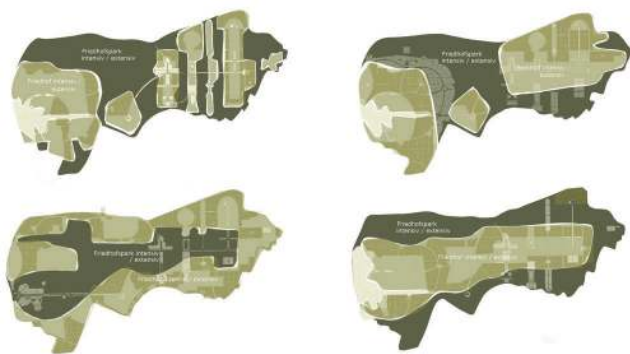


図-2 オールスドルフ墓地の墓域と緑地の比率変化シナリオ (Ohlsdorf 2050 シンポジウム資料)

日本の公営墓地は、住民の税金で整備、運営されるため、基本的には地域内の住民を対象としたものとなる。しかし、これからの時代、都市と地方を結びつける墓地の役割はますます重要になる。前述のような遺骨問題を抱える日本においては、ふるさとに終の住処を見出すための仕組みとして、樹木葬墓地が位置付けられる試みも見られる。また、荒廃する森林を保全活用するという視点から、森林環境譲与税が新たに導入されているが、樹木葬墓地は森にヒトやカネを循環させる仕組みとしても今後注目すべき手法だろう<sup>9)</sup>。

## 6. グリーンインフラとしての樹木葬墓地

森林だけでなく、都市型の樹木葬墓地にも新たな役割が期待されるだろう。日本で最初の公園墓地、多摩墓地（現在の多磨霊園）以降、墓地には都市緑地としての機能も期待されてきたことを忘れてはならない。当時、日本に公園墓地が日本に導入される際にモデルとなったハンブルクのオールスドルフ墓地は、世界最大級の389haにおよぶ墓地の管理を公園緑地と一体的に考えている興味深い事例である。墓地需要に応じて、敷地全体の面積における公園緑地と墓域の比率を変化させながら、墓域部分は墓地の収益によって独立会計で運営し、公園緑地部分は市が税金で管理するという方式を取っている。人口減少が進む将来の墓地空間のあり方を検討する

「Ohlsdorf 2050」プロジェクトでは、都市のオープンスペースとして墓地をどう活用していくかが住民参加で議論されている。その中では、図-2に示すような、墓域と公園の柔軟な土地利用についても検討されている。

日本においても、横浜市の公営樹木葬墓地が、かつてのテーマパーク跡地に運動公園と墓地とを一体的に再整備したものであったり、越生町の公営樹木葬墓地がつつじ公園の隣接地に整備され、将来的にはつつじ公園と一体的に整備することを想定されたりしているように、都市施設としての墓地と公園緑地とを一体的に捉え、さらには地域環境の保全として墓地を整備するケースが増えていくと考えられる。樹木葬によって、これまでの石のお墓というグレイインフラは、都市のグリーンインフラへと転換し、その役割を大きく変えるかもしれない。

## 補注及び引用文献

- 1) 本稿は主に、上田裕文(2020)「ドイツと日本の樹木葬墓地の展開」, 公園緑地80(4), 13-16に加筆修正を加えたものである。
- 2) 横村久子: お墓の社会学-社会が変わるとお墓も変わる, 晃洋書房, 228pp
- 3) 森謙二: 墓と葬送のゆくえ, 吉川弘文館, 214pp
- 4) 鈴木岩弓・森謙二: 現代日本の葬送と墓制, 吉川弘文館, 224pp
- 5) 上田裕文: ドイツの樹木葬墓地にみる新たな森林利用, ランドスケープ研究79(5), 537-540
- 6) 上田裕文: こんな樹木葬で眠りたい-自分も家族も幸せになれるお墓を求めて, 旬報社, 208pp